

岡 山 県
バスケットボール協会史

(創立より — 昭和42年5月まで)

The History of Okayama Basket-ball Association
(From the foundation to May 1967)

(執 筆 責 任 者)
(The Writer)

山 下 博
(Hiroshi Yamashita)

<復刻版>

初期の強剛，矢掛中学チーム



昭和4年12月 岡山県下中等学校 籠球選手権大会優勝



第6回明治神宮体育大会出場

前列左より 西野,坪井,齊藤,佐藤
二列目左より 松枝,石山,古市
立っている左から 堀,中西先生,亀山,上田



昭和13年 全日本総合バスケットボール選手権大会
京都府立二女との優勝戦 <山陽高女>



昭和12年 西日本バスケットボール選手権（女子）優勝 <山陽高女>

昭和24年度西大寺高チーム

前列右より

松下, 高島, 小西, 森下, 青木

後列

小橋, 小坂, 岩谷, 奥山, 赤木

- ◎ 高松大会 — 優勝杯
- ◎ 全関西大会 — 優勝楯
- ◎ 西日本ジュニア — 優勝ペナント



昭和28年度就実高チーム
 <トリプル, クラウン>

前列右より

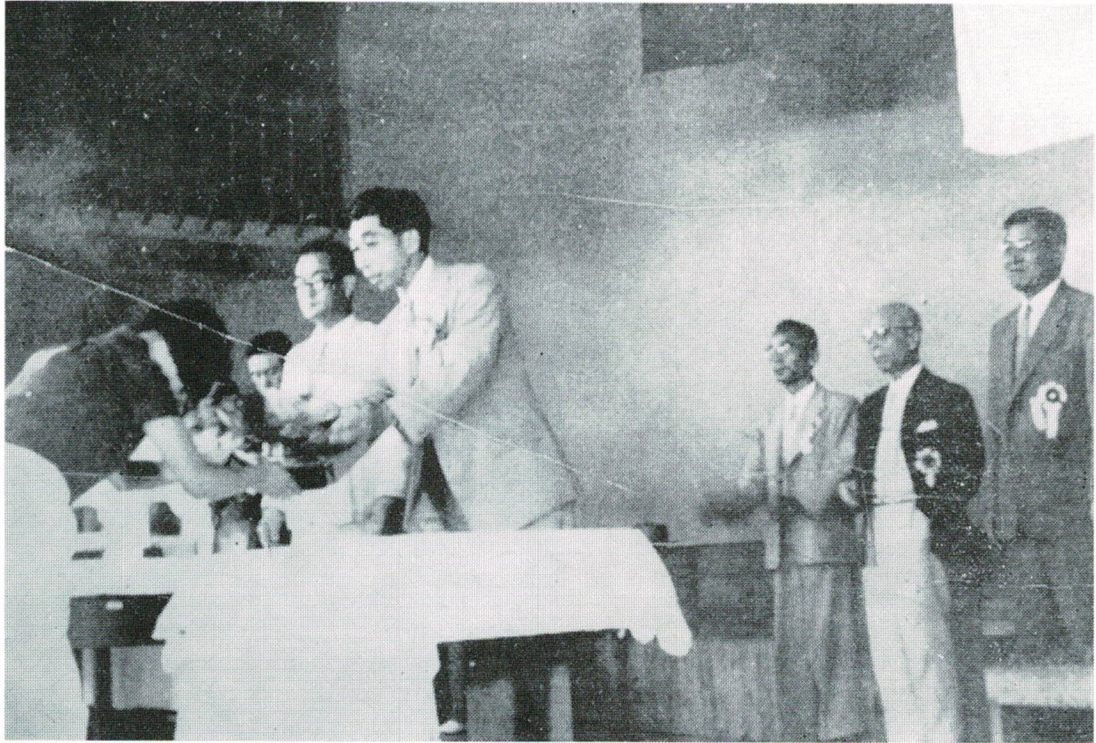
丹原, 青井, 堀口
 佐々木, 松田, 塩見

後列

山口 (コーチ) 佐藤
 岡, (部長) 山田
 小野 (監督)

- ◎ インターハイ優勝
 高松宮杯
- ◎ 西日本高校女子部
 優勝旗
- ◎ 国体優勝
- ◎ 岡山県選手権
 優勝旗





昭和28年 インターハイ 高松宮賜杯
受賞式 (佐々木首将) <就実高女>



昭和37年 インターハイ (於宇部) - 岡山国体出場選手 <倉敷工高>

目 次

○	はじめに	
1)	わが国へのバスケットボール競技の移入	1
2)	岡山県へのバスケットボール競技の移入	1
3)	初期の強剛、矢掛中学と岡山高女	2
4)	明治神宮体育大会への初参加	3
5)	岡山県籠球協会の創立	3
6)	輝く籠球、山陽高女の足跡	4
7)	戦争とバスケットボール競技	4
8)	終戦とバスケットボール競技	5
9)	国民体育大会による推進	6
10)	一般チームの台頭	7
11)	教員チームの編成と新制中学校大会	8
12)	高校王座の変遷と大学チーム	8
13)	岡山国体めざしての協会強化	9
14)	岡山国体を迎えて	10
15)	岡山国体の印象と成績	11
16)	国体での競技運営	12
17)	歴史的国体を生かす途	14
18)	将来への展望と歴史の要約	15
	(中学)(高校)(一般男女)(大学・教員)(海外派遣選手)	
19)	歴史を作った人々	21

○ は じ め に

エベレストの登山家マロリーにむかってある人が「なぜにあなたはかくもしばしば、エベレストに登るか」と聞いた。するとマロリーは「そこに山があるからだ」と静かに答えたという。

「なぜにバスケットボール競技の岡山県史を書く気になったか」と問われたら、私は『バスケットボールが好きだから』と答えるだろう。しかも今誰かが書かなかったら、大切な史実が不明になるおそれがあるということも元気を出させた理由である。

それにしても歴史を書くということはなかなか骨が折れるものだ。こんな小史をものするにも史実の正確を期すために多くの先輩や同僚のご協力を仰いだ。そのために不連続であったが時間的に数年を要した。

願わくば後続く愛好者各位に今後の積み重ね的努力をお願いする。

1) わが国へのバスケットボール競技の移入

バスケットボール競技の歴史は若い。バスケットボール競技が考案指導されたのは1891年で、誕生地がアメリカのマサチューセッツ州、発案者がジェームス・A・ネイスミスであることはまず記述の順序として記さなければならないだろう。こうみえてくるとこの競技の生活年齢はまだ80年に満たないことになる。しかしその普及力は強く速かった。今日では世界の隅々までに拡がり、メジャースポーツの1つになっていることも周知のとおりである。

さて、わが国への移入はいつ誰によってなされたものか、これも序として知っておく必要がある。それについては次のようにいわれている。初めて紹介されたのは1908年（明治41年）、紹介者は東京YMCAの大森兵蔵となっている。しかし本格的に指導されだしたのは1914年（大正3年）頃だといわれ、その中心地は神戸で普及指導に尽力した人として神戸YMCAのF・H・ブラウンが記録されている。いずれにしてもわが国のバスケットボール競技はYMCAを通して移入されたことになる。しかも初期に紹介されたところは今日でもその爪あとが深く、関東では東京、関西では神戸がバスケットボール競技のメッカ的存在となっている。

では岡山県への移入経過はどうであろうか。

2) 岡山県へのバスケットボール競技の移入

岡山県へバスケットボール競技が移入されたのは1923年（大正12年）で、移入者は当時矢掛中学（旧制）の体育教師であった中西静雄（後に西村と改姓）であった。彼は日本体育専門学校卒業後、刈谷中学（愛知県）に就職、4年間、主として球技を研究した。その理由は彼の体育観にあった。すなわち個人的プレーをする武道や陸上競技よりも、球技などによる団体的競技をさせることによって社会的訓練を主とした体力づくり、人間形成をする方が学校体育としてはよいということにあった。そのうちもっとも重点をおいたのはサッカーであったが、矢掛中学に来て見ると運動場が以外に狭く、授業として実施するには実際的でなかったので重点をバスケットボール競技に変えたというのである。彼のバスケットボール指導のやり方は、1本柱に方形バックボードを取り付け全クラス2交替位で消化出来るようコートをつくり能率的に授業をすすめ、授業として全員に実施、その中から出来る生徒、好きな生徒を選び対外試合をやらせたというのである。思えば選手はつくるのではなく出来るのだという理想的な方法によったといえよう。

さて、大正12年5月には大阪で第6回極東オリンピック大会が開催され、バスケットボール競技もその重要実施種目に加えられた。矢掛中学に勤務していた中西も幸運にもこの競技会の運営に参画する機会を得、わが国のみならず諸外国一流チームのプレーを見ることが出来た。そのために彼のバスケットボール競技への情熱は一段とたかめら

れ、矢掛を中心とした普及指導は次第に全県下に拡大されていった。

さらに都合のよいことに大正13年・14年頃になると全国的にも体育会の大きな潮流としてバレー・バスケットの球技が脚光をあびて来たことである。そこへもって来て大正15年には体操科の指導要目が法的に改正され球技は重要種目として取り入れられ、バスケットボール競技もぜひ指導せねばならないいわば必修種目となったのである。そのためにバスケットボール人口は中学校、高等女学校を中心ににわかに増大されていった。クラブ活動としてのバスケットボール部も男子では矢掛中学をはじめ、笠岡商業、岡山二中、関西中学、岡山師範、岡山工業、吉備商業などが相前後してチームづくりをすれば、女子の方も岡山高女、山陽高女、就実高女、西大寺高女、順正高女、和気高女、矢掛高女などが、われ劣らじとチームづくりをし、競技会に参加するようになったのである。思えば岡山県のバスケットボール競技は矢掛を誕生の地とし、中学校（旧制）を母体として育ったといえる。

3) 初期の強剛は矢掛中学と岡山高女

昭和2年には中西、藤沢らの努力により籠球普及をめざして備南籠球連盟がつくられた。

ここで籠球という語が登場したがこれは当時ではバスケットボールのことを名古屋以東では籠球、以西では藍球といていた。それを統一して昭和2年頃から籠球と呼唱するようになったからである。

さて、備南籠球連盟は発足以来、技術やルールの研究、地区別の競技会の開催などを私的にもち、設立者は私財を割いて生みの悩みや育ての苦勞を味わい続けたのである。しかしこの苦勞も昭和2年末岡山県体育協会が行啓記念として設立されてからは県体育協会の力で全県的に、しかも春秋2回にわたり競技会がもたれるようになり中西らの苦勞は一応解消された。当時すなわち昭和3～4年頃の記録は余り詳細ではないが、男子では矢掛中学・女子では岡山高女が圧倒的に強く、公式記録として残っているのは昭和5年6月に福山市で行われた山陽地方籠球大会に矢掛中学が優勝していることのみである。なお、矢掛中学は昭和5年～6年頃が最も強く、その当時盛んに行われた旧制高校主催の近県中等学校籠球大会には、それぞれに優勝またはこれに近い上位の成績をおさめている。すなわち六高大会、岡山医大会は勿論、松江高校大会、広島高師大会、山口高商大会、高松高商大会に遠征し、矢中強しの名を近府県にとどろかせた。一方女子は岡山高女が県内の大会ではもの足らず、昭和5年11月には第5回全日本女子中等学校籠球選手権大会に出場し大活躍をしたらしいのであるが、残念なことに詳しい記録が残っていない。いずれにしても昭和6年頃までは男子では矢掛中学や関西中学、女子では岡山高女がずば抜けて強く、県外までもその名声をはせたことは、初期において岡山県バスケットボール界の意気を示したものの、輝かしい先駆をつとめたとして敬意と感

謝を捧げねばならない。

4) 明治神宮体育大会への参加

ところが昭和6年になると岡山師範が急に強くなり、伝統の矢掛中学や関西中学をおびやかす王座をゆさぶれば、一方女子チームもかなりの変動が起こってきた。すなわち新鋭として山陽高女・倉敷高女・西大寺高女が台頭し、めざましい躍進ぶりを示したことである。この年9月に行われた第6回明治神宮体育大会の籠球県予選会（関西中学グランド）ではこれが今までにない接戦となり、常勝チームであった岡山高女は準決勝で倉敷高女に喰われるという番狂わせを演じるとともに、山陽高女は西大寺高女を敗り、山陽高女対倉敷高女の決勝戦となり、山陽高女は27-7で初優勝、矢掛中学とともに晴れの神宮体育大会に駒を進めることになったのである。

さて明治神宮体育大会はそれまでに過去5回開催されたが籠球競技が行われたのはこの年がはじめてであり、こうした名実ともに全国大会への参加は選手たちをどれ程よるこぼせ、光栄に思わせたことか、当時の新聞にその手記がありその一端がうかがえる。しかし出場しての成績は岡山県のレベルが余りに低かったのか山陽高女は1回戦不戦、2回戦で新津高女に21対3で惨敗、矢掛中学も1回戦不戦で2回戦に同志社高商に35対21と、ともに2回戦で敗退したのであった。〈注〉－（矢掛中学は昭和10年にも神宮出場、新潟師範と対戦輝かしい戦跡を残した。）かくて男女とも余り香ばしい成績ではなかったが、特に山陽高女はその翌年から約10年間続いた黄金時代へのよいきっかけになったことを思うとこの敗退こそがよく利いたカンフル注射であったといえよう。さて山陽高女はその体験、失敗から何を見出し如何にこれを生かし意欲し実践に移したのであろうか。

5) 岡山県籠球協会の創立

次にしばらく競技史の筆を止め、県協会の誕生について筆を走らせよう。昭和5年9月に日本籠球協会が創立され全国を9ブロックに分け普及をはかった、昭和6年には広島に山陽支部が設けられ、岡山と山口に加盟するよう要請されたのもこの年であった。そこで本県においてはこの年の末頃から県支部を設立しようとの声が出て、以前から籠球に熱意をもっていた中西静夫（矢掛中）、大橋哲一（山陽高女）、西本義行（清心高女）、佐藤健三（関西中）、藤沢敏夫（笠岡商）などが中心となりその準備を進めていたのである。そしてこれらの発起、提唱者たちはさらに慎重に準備するため、翌7年に日本協会理事鈴木重武の来岡を要請し、中央との連絡方法全国的動向を知り準備を進めていった。こうして昭和8年9月19日、ついに岡山県籠球協会の設立に踏切ったのである。初代会長 横山早太、理事長 西村静夫、常務理事に大橋哲一、藤沢敏夫ら4名、西本義行が事務を担当するといった陣容であった。ただちに岡山県体育協会に

加盟するとともに一方日本籠球協会にも支部として加盟する手続きをとった。そこで今まで組織のないままに個々別々に行動していた各中等学校籠球部は、一斉に県籠球協会に加盟し、学校体育の一環としての部活動をようやく機構的にも軌道に乗せ、整備することが出来たのである。

6) 輝く籠球山陽高女の足跡

ここで再び競技史に筆をもどそう、昭和5年をさかいに籠球王座のバトンは岡山高女から山陽高女にタッチされた。すなわち情熱の指導者、大橋哲一は第6回明治神宮体育大会出場の苦い経験を肝に銘じ、それ以来は本格的な競技の研究と指導に精進した、その甲斐あって以後10年間岡山女子師範に一敗(昭和7年)したのみで県下大会は勿論、近府県の大会、西日本の大会に君臨することができたのである、そして昭和8年には全国大会で優勝戦に進出、京都府立第一高女と延長戦3回、惜敗するまでに成長したのである。特に昭和10年には西日本ジュニア選手権大会で優勝、6月には全関西府県選抜籠球大会にも優勝、10月には第8回明治神宮体育大会に県代表として出場、再び京都府立第一高女と優勝戦にまみえ善戦(13対9)惜敗するという好成績を残した。これらの大会で山陽高女が如何に活躍したかは、当時の朝日新聞が“岡山県代表山陽高女は全日本スポーツ界の明星としてさんたる光芒を放った”との記事を掲載し、惜しみない賛辞を与えたことによってもその一端をうかがい知ることが出来るであろう。さらにその後も昭和12年の第7回全日本女子総合、第9回明治神宮体育大会、昭和13年の西日本女子中等選手権大会、昭和14年の全日本女子総合選手権大会にいずれも準優勝、もしくは優勝して、いよいよ山陽高女の名は全国的に知れわたり、“籠球山陽”として輝かしい足跡をのこしたのである。

しかし教育は結局人である、名監督大橋哲一が、この年8月招かれてかつての宿敵、よきライバルであった京都府立第一高女に転出するにおよんで、さしもの山陽高女もようやく斜陽、それに時あたかも苛烈になっていった日中戦争のため、国内状況緊迫が因となり果てとなり、伝統のバスケットボール部も遂に発展的解消という名のもとに廃止のやむなきにいたったのである。

それにしても約10年間、山陽高女の岡山県籠球界に残した足跡は余りにも明らか、われわれは偉大な功績をたたえるにやぶさかであってはならない。

7) 戦争とバスケットボール競技

さて、一方男子は昭和10年頃より県バスケットボール競技創世当時よりの名門矢掛中学、関西中学などが次第に衰え、代わって岡山工業、岡山二中、天城中学、吉備商、岡山県商、興譲館中学などが時により処によって県下の覇権を争った。しかし戦国時代のそのように何れも長続きはせず、レベルも全国的に見て概ね低く、女子の輝かしい成

績のそれには比すべくもなかった。これは主として固定した指導者がいなかったことと創立日なお浅く伝統がなかったことが原因と思われる。それは兎も角として前述したように昭和12年以來の日中戦争はいよいよ悪化の一途をたどり長期戦の様相をおびてきた。突如昭和16年12月にはさらに太平洋戦争に突入、わが国はいよいよ非常事態となり、戦力増強一途、平和的スポーツは次第に姿を消していき残るスポーツも戦争の具に供せられ、その残骸を止めるにすぎない姿となった。そのうえ大正13年依頼続いたわが国のスポーツの祭典、明治神宮体育大会も昭和16年には名も国民錬成大会と改称され、内容も1部変更、こうして遂に昭和18年には閉幕、中止するの止むなきに至ったのである。

従って自由主義国家群のスポーツと目されていたバスケットボール競技も昭和16年、協会の名前からして日本籠球協会と改称され、17年には大日本体育協会籠球部会として発展的に解消された。従って全国各地の籠球競技会も次第に火の消えたようになり昭和18年には殆んど行われなくなってしまった。そして、昭和20年12月中央組織が日本バスケットボール協会として再発足するまでの間、大きなブランクを作ったのである。思えばこの期間が本競技の進歩発展をどれほど阻害したかは知る人ぞ知るであるが、当時の客観状況からすればそれは全く万止むを得ない処置であったといえよう。

8) 終戦とバスケットボール競技

太平洋戦争はわが国、未曾有の敗戦の姿で昭和20年8月15日、終戦の詔書でケリがついた。国民は全く茫然自失、虚脱状態、為すところを知らなかった。さらにこの精神的危機に拍車をかけたのが食糧危機であった。このため世間にはわが国の前途はもうこれで駄目なのではないかという悲観論さえ横行した。しかし復興のチャンスは意外に早く訪れた。それは他ならぬアマチュアスポーツの台頭であった。敗戦国民としては心のうさの捨てどころ、占領軍アメリカとしては占領行政の一環として自由主義的スポーツの復興は好ましいものとしてこれを保護、助長したからである。とくに発生地をアメリカにもつバスケットボール競技はベースボールやバレーボールとともに再建スポーツの先駆をつとめたのである。

さて終戦後のわが岡山県のバスケットボール競技の復活はどんな経過をたどったであろうか。それについて思い出すのは昭和20年の末、まだなまなましい敗戦の爪跡が消えやらず、焼け残ったごみごみした体育館や芋畑になっていた運動場の一角から、戦前の有志によって立ち上がったことである。しかもこうした立ち上がりを促進助成したのが、山陽新聞社をはじめ各新聞社その他マスコミの力であった。なお今一つは岡山県バスケットボール協会の早期再発足であったであろう。まずマスコミ関係では山陽新聞社が一般男子の大会や高校の選手権大会を助成し、県下バスケットボール関係者を刺激したこと。さらに中四国高校チームの親睦と技術の向上をめざして、中四国大会を金光

町で慣例的に開催したことである。思えばこうした試練の機会を与えられたことが終戦後間もない2・3年間、本県バスケットボールが比較的強かった原因であった。

一方県バスケットボール協会の早期再発足についてはすでに21年の早々から話題となり、3月頃からは本格的に準備し21年8月29日、ついに再建、発会式を行ったのである。会長に小野寿吉、理事長に大橋哲一を、常任理事に山下博、野崎新作、谷川清らを、さらに理事に藤川知彦他11名の堂々たる陣容であった。また協会の立ち上がりはこうした組織面のみでなく、21年3月には未組織のままに戦前のOBを主体に同好の士が中心となって、西大寺市でバスケットボール競技、技術の一大講習会を開き、技術面よりの立ち上がりを容易にしたことである。この講習会は戦災をまぬかれた西大寺高女の体育館を会場にし、三泊四日の合宿講習会であり、講師には当時西日本、否、全日本のトップレベルにあった人々を招へいたのである。すなわちベルリンオリンピックの出場選手、松井聰、三橋誠、田中義利らを始め白山武郎、松本幸雄、川端正らを迎え、理論に実地に、終日汗を流したのであった。なおこの講習会での特記すべき思い出はまず当時は何といても言葉通りの終戦直後、食糧事情は全く困難で用具など特にボールは貴重品であったこと、靴もない、ユニホームもない。ないないづくしの生活の中にリュックを背負って集まった、多くの男女高校の選手のこと、そしてこれらの食糧や備品を世話した野崎らを中心とする協会幹部の苦労のなみなみでなかったことなどである。籠に乗る人、かつぐ人、肩の痛さに尻のいたさを地で行く有様、でもこうした先輩の努力があったればこそ、その後数年間、西大寺高女や倉敷工業、操山高女が西日本大会を始め全国的にも活躍出来たのであった。

9) 国民体育大会による推進

敗戦は前述したように20年の末頃までは、一般国民に虚脱の状態をつくったが、政府は前述したように早くも国民の間にとくに若人の間に自由主義スポーツが台頭して来たのを捉え、さらにわが国民に明るさと元気、復興への意欲を促進するために、翌21年秋、第1回国民体育大会を開催したが“国民の国民による国民のための民主的体育大会”を標ぼうしたもので虚脱よりの脱出を文化運動、特に体育スポーツの奨励に求めた施策であった。この施策は、結果的にも賢明な策であった。国民は苦しい食糧事情を忘れて国民服や軍服くずれを身にまとい、リュックを背負ってよろこんで参加した。

第1回の京阪地区での国体もさることながら、第2回の石川県を中心とした国体からはいよいよ軌道に乗った。まず各都道府県で盛大な予選会を持ち、さらにブロックの予選を通過して晴れの大会へ出場し、府県別対抗ということでスポーツへの関心はにわかになら高まった。バスケットボール競技もご多分にもれず、各府県とも次第に活気を呈し、予選会も年とともに盛大に行われるようになった。

わが岡山県でも中等学校が中核となり、備前地区で古豪の岡山二中、岡山工業、岡山

県商、関西中学、新鋭の玉野中学、それに女子では西大寺、就実、岡山一女、邑久、玉野など、備中地区では男子に矢掛、笠岡、金光、倉敷中、倉工、倉商、女子では矢掛、倉女、そして美作地区に行けば、津山中、津山商、津山高女、福渡商女らが相前後して部を結成し参加、覇権を争ったのである。さてこれらの中で最初から頭角を現したのは男子では倉敷工業、岡山二中、西大寺中、女子では西大寺高女、玉野高女などであった。試みに昭和21年から25年までの県下選手権保持チームの名をあげると1・2回は倉敷工業、3・4回は岡山二中、5回目は西大寺中となっている。その中、昭和23・24・25年頃の岡山県勢は断然強かった。昭和24年、岡山二中は、小林、尾崎、立花、水間、栗原、橋本らのメンバーで西日本大会〈高松市〉で優勝、倉敷工業もまた3位の成績を残している。続いて25年倉敷工業は鳥取における西日本大会で、近藤、岡田、河村、藤原、山川らを中心に準優勝している。女子でも西大寺高女が松下、高島、小西、森下、青木、岩谷らのメンバーで西日本各大会を征覇し、岡山のバスケットは強いとの評を受けていたのである。この原因は何であったかは前述したので省略しよう。

10) 一般チームの台頭

終戦後、岡山県バスケットボール界で大きく変わった現象の1つに一般人がバスケットボールに親しみ、一般の大会が持たれるようになったことである。これは岡山クラブの結成がきっかけとなったのであるが、このクラブは戦前の昭和15年頃すでにささやかながらクラブらしいものをつくっていた。岡山市東山にあった階楽園コートで練習したり、市内中等学校チームの指導に出かけ練習していた歴史をもっている。終戦後もいちはやく立ち上がり、小野寿吉、山口雅生、柳沢栄一、高成田三郎、難波英和、人見英一、谷川 清、玉地智治らのメンバーでチームをつくり、21年春には早くも西日本一般選手権大会に出場、新瀉商と対戦、惜敗するという実績をもち配給ボール制であった当時、存在を明らかにしてボールの配給などを確保したというほほえましいエピソードをも残している。続いて21年秋には国体中国ブロック予選に出て敢闘し、22年夏には高松市の第1回近府県一般男子バスケットボール大会で準優勝して貫禄十分なところを示している。その後もたびたび国体に出場したり近府県大会で優秀な成績をあげていた。また県内では昭和33年倉敷工業に敗れるまで連続10余年に亘って岡山県一般選手権のタイトルをもっていた。当然なこととはいえ偉とすべきである。

さらにこのクラブの間接的功績ともいえるべきものに後輩に無形の刺激を与えたこと、実業団チームや他の一般チームを誕生させたことである。すなわち前後して倉敷クラブ、倉敷レーヨン、岡山国鉄、岡山国立病院、岡山電々公社、中国電力つづいて新三菱、柵原鉦山、エックスラン、岡山製紙などのチームを誕生させ、昭和26年には第1回の県下一般の部のバスケットボール選手権大会をもつまでに成長させたのである。

一方女子一般では就実高女のOGをもって囲生クラブが結成され30年頃から独走

ながら国体などで敢闘しその存在を明らかにするとともに津山クラブや南和クラブの結成を推進したのである。

1 1) 教員チームの編成と新制中学校大会

昭和25年頃から協会役員会などでよく話題になったのは“どうしたらさらに岡山県のバスケット競技が強くなるだろうか”ということであった。そしてその討論の結果出た答えがまず「根本的対策をたてることだ」それには指導者、教員に実力をつけることと、次が中学校のバスケット指導に重点をおいて中学校大会をもち、協会がこれを育成することだということになった。このうちすぐ実行出来るのは兎に角中学校大会を開催することだということになり、その第1回大会を25年の秋倉敷工業でもった。最初の大会であったが、倉敷、岡山、金光などより14チームが参加し男子金光学園中学、女子就実中学がそれぞれ優勝した。その後実技講習や審判講習などで益々普及し、中学バスケット人口は飛躍的に増大した。従って大会参加チーム数も会を重ねるごとに多くなり、現在では男子80チーム、女子60チームの多きを数えるまでに普及発達した。その間男子では倉敷水島中学、連島中学、岡北中学、旭東中学など県南チームが一般的に強く、女子は年によって、県南部、中部、北部と変わっているが一般的には美作地区が強くなったといえよう。この原因をバスケットボールがもつ基礎技術の重要性や、これからくる中学校バスケットの特性と見るのは間違いだろうか。

一方教員チームは25・6年総社あたりでその芽生えはあったようだが、昭和29年になって主として岡大出身者により編成、山下 博が監督となり統括したのが最初だろう。29年30年とこれまた逐年増強され、メンバーも広く日体大、鳥取大、日大と吸収され中国ブロックのAクラスまでに成長、度々国体に出場3-4回戦位までは進出出来るまでになった。今一步で全国教員大会のAクラスに入るまでになったものの、この壁がなかなか破れないのはなぜだろうか。プレイヤーの質や量の問題もあろうが、多分に勤務地の拡散による地理的、経済的要因による練習不足があると思われる。しかし同好の士による教員チームの存在は、否この強化はその職業的性格からして、中・高校チームの強化となり、岡山県バスケットボール競技のレベル向上の鍵を握るものになったことは争えない事実である。

1 2) 高校王座の変遷と大学チーム

まず女子高校チームは前述したように、終戦後から昭和25年頃までは完全に西大寺高校チームの黄金時代であった、その間、玉野高校が一時台頭、制覇したこともあったが後援続かず依然西大寺高校が名をなしていたといえる。しかし昭和26年をさかいにその王者は就実高校や総社高校におびやかされるようになった。特筆すべきは昭和28年の就実高校チーム、丹原、松田、塩見、青井、堀口、山田、佐藤、佐々木、等の活躍

である。県下は勿論、西日本、国体、インターハイに優勝、かつて先輩校山陽高女、西大寺高女がなし得なかったトリプル・クラウンの宿願を美事なしとげ輝かしい記録を残し、岡山県バスケットボール競技史に不滅の一頁を加えたのである。この原因については選手の質もよかったかも知れないが、それよりも選手、監督、コーチ（小野寿吉、山口雅生）および学校当局が三位一体となり、合理的に強化訓練したことがその主因であったように思われる。さてその後もたえず新鋭総社高校との間に激しい、ツバぜり合いを続け、依然トップレベルでの争いを続けたのである。その長年に亘る努力、成績には敬意を表せねばならないが、その成績は情熱の監督岡本（総社高）、冷静のコーチ山口の対戦の賜物でもあった。またそのライバル間の競争が独り女子高チームのみが全国Aクラスの実力を保持出来る所以でもあろう。それに引きかえ男子チームは終戦後から倉敷工業が独走に近く20年来覇権を握っている。インターハイ19回の中15回出場の記録をもち、出場回数では断然全国的名門となっている。それでもその間、時に操山高校、西大寺高校、金光学園高校、倉敷商業にタイトルを奪われたことがあったが、常に上位成績を保っていたのである。思えばこれも客観的に見て偉大な足跡といえるのではないか。勝つことは困難であるがさらにこれを続ける、しかも20年も続けることは生やさしいことではないからである。

次は岡山県における大学チームの履歴を記述しておこう。その主軸をなす岡大チームが結成されたのは確か昭和26年頃かと思う。さて地方大学の部活動運営の困難性には幾多のものが考えられる。まず高校より優秀選手の請入れがむつかしい。よいコーチが得られにくい。ビッグゲームを見る機会が少ない。経済的裏付けも少ない。等々こうした数々の暗礁を乗り越えて岡大チームが兎にも角にも中国五大学や西日本学生で優勝もしくは準優勝にまで漕ぎつけていることはその努力について高く評価すべきであろう。女子では体育短大が36年に創立され、それ以来着々チーム作りに努力してかなりの成績をあげているが、何分創成日尚浅いところへ修業年限2カ年では充分なことは出来ない。チーム作りの困難性にはさらに高いものがあり努力の割合に報いられない憾みがある。しかし将来教師となり指導すべき立場にあることを思えば、技術よりまずバスケットを愛する情熱を養う方がより基本的性格かもしれない。その点現在の行き方に大いに敬意を払うべきものがある。

1 3) 岡山国体めざしての協会強化

昭和28年、就実高校がトリプル・クラウンの輝かしい記録を作ったころ、昭和36年を期し岡山で国体を開催するんだとの声明が県体育協会より出された。国体種目をもつ各専門協会関係者は何より耳をそば立てた。しかしわがバスケットボール協会関係者では本当にやれるのかな、それにしてもまだ10年もあるではないかと、なかなか準備体制に踏み切れなかったのがいつわらない告白である。それでもどうして請け入れたら

よいか、どうしたらよい成績をあげることが出来るのかと会合のたびごとに次々と議論はされた。強化についても高校女子チームはその余じんをかっていくとしても他の高校男子や、教員、一般男子、一般女子は何とかして強化せねばならない。さらに国体を迎えるについてはその運営をスムーズにし、外来の選手、役員にも好意を与えねばならない。かくて夢は走馬灯のようにめぐるが議論はから廻りした。

さてこうするうちに協会自体の機構の強化が先決だと気がついて協会の機構を総務、渉外、審判、オフィシャル、競技、技術の各委員会に組織がえしたのが30年になってからであった。各々その分野担当の委員を決め、先進国体開催府県の視察、実情調査に出かけたり審判や競技技術の講習を本格的にもつようになったのは昭和32年頃からであった。またできるだけ大きな大会を招致し、実際に大会運営の体験をしようということになり、日本バスケットボール協会とも緊密に連絡をとっていった。それについて最も効果的なインターハイの誘致には数年にわたり努力したが、ついに所期の目的を達成することが出来ず高体連関係者がエキサイトするひとこまもあった。しかしそれだけに審判やオフィシャルの講習は前後6～7回にもわたり、この道のエキスパートを招き実地講習を行い万全を期した。また施設、設備の配慮も細心にして雄こんな構想を練り、対県や対市の交渉をもった。そのおかげで概ね35年位までには先進他府県に負けない自信を得るまでに施設や運営技術が獲得された。残るのは選手強化の仕事のみとなった。だがこの仕事は容易な業ではなかった。これについては技術講習を数度行い、候補選手の県外遠征をするやら合同練習や数次にわたる合宿訓練をもつやらして、選手強化の施策を次々と実施していった。しかしながらなかなか所期の効果は現れなかった。なお教員や一般の部は優秀選手の県内就職をも勧奨し、選手の質と量の確保をはかったがこれも意のようにはならなかった。

1 4) 岡山国体を迎えて

かくて昭和36年を迎えた。県としても後1カ年を前に本格的な準備に入った。諸施設、設備の完成を期するとともに、運営上の人物構成も専門的に分化し指導や連絡を密にした。また1,400万という強化費を配分し強化の裏付け具体化に拍車をかけた。一方直接選手強化に当る関係者は背水の陣をしいて最後の追い込みに懸命となった。しかもその間隙を縫って競技運営や審判講習など各自担当分野の仕上げに全力を注がねばならず、全く一日一日が追われる気持ちであった。何か眼に見えない大きな力に押しつけられた感じの連続であった。こうしていよいよ待望の昭和37年を迎えた。圧迫される度合いは一層強まり、関係者はあと何日あと何日と時間読みの段階に入り焦燥感にかられていった。そのうち選手強化も好むと好まざるとにかかわらず第一次候補、二次候補、三次候補と次第にしぼられていった。ついに6月下旬から7月上旬にかけ最後のふるいがかけられ岡山国体出場の選手が決定された。思えばながい長いばらの道であ

った。さて地元で国体を請け入れるときはフルエントリー、全種目に出場出来ることである。いよいよ決定、晴れの代表となった出場チームは次の通りである。

1. 高校男子の部・・・・・・・・・・県立倉敷工業高校チーム
(監督 山下 博)
2. 高校女子の部・・・・・・・・・・就実高校チーム
(監督 武田 務)
3. 一般男子の部・・・・・・・・・・倉工OBチーム
(監督 野上良一)
4. 一般女子の部・・・・・・・・・・就実OGチーム
(監督 山口雅生)
5. 教員の部・・・・・・・・・・岡山教員チーム
(監督 前田哲哉)

ただここで注目すべきは男女高校と一般チームが奇しくも、倉敷工業、就実の両校関係者にしぼられたことである。これを偶然の結果といえばそれまでであるが、伝統的努力の賜物と解するのは間違いであろうか。

1 5) 岡山国体の印象と成績

予選終了後、県体協や教育委員会、高体連はそれぞれ激励会をもち、選手、監督の発憤を促し好成績を切望するとともに、強化費の再配分、会場の施設、請け入れ体制に万全を期すなど具体的実践に懸命の努力を払って晴れの日を待った、一方選手、監督は秒読みの段階に入った残る僅かの日数をも有効にと、これまた最後の合宿や遠征を行いコンディションの調整につとめた。そして心の中は地元での国体に臨む栄光に酔いながらも、その喜びと誇りが大きいだけに責任も重大と不安とあせりでいっぱいであった。こうして運命の日を、否、歴史の中の1日を待望したのである。

日は過ぎ時は刻みついに待ちに待った10月21日が来た。大会の華、開会式の当日を迎えたのだ。絶好の秋日和だ。紺碧の空に白雲が浮かんでいた。半田山麓にファンファーレが鳴り響いて入場行進がくりひろげられた。それはきらめくとりどりの色、斗志と情熱と意気を爆発させ、たけを尽しての足どりだった。爆音の中に湧き上る歓声とどよめき、しかも人々の心をしめつけた厳粛な開会式であった。そして明くればー22日ーいよいよ競技開始だ。岡山県営体育館で一般男子、操山高校体育館で一般女子と教員、岡山大学体育館で一般男子、桑田中学校体育館で一般女子、鹿田小学校体育館で高校男子と高校女子、岡山南高校体育館で一般女子の競技が一斉に六会場にわかれて熱戦の火蓋を切った。そして競技大会は三日目から県営体育館に集中された。さしものマンモス体育館も超満員、26日の一般男子決勝の日まで全く力とわざ、意気と熱の体当たり感激のるつぼと化した。連続する美技にただ観衆は酔いビッグゲーム国体バスケットを遺

憾なく満喫したのであった。さらに特筆しておきたいことは、勝つも負けるも参加選手および関係者の各人から異口同音に施設の完備と運営のスムーズさを感謝されたことと、特にオフィシャルの正確さは未だ曾てないとおほめのことばを貰ったことである。

さて、待望の課題、岡山県チームの活躍はどんな具合であったらうか。その答えを総体的に結論的にしかも単的に出せば残念ながら「余り香しくなかった」と答えるよりほかないのではないか。それでもフルエントリーのおかげで総合で女子が4位、男子が5位を得たことはせめてものなぐさめであったといえよう。

次に大略ながら各部門の戦績を振りかえって後日の参考にしよう。まず一般男子だが一回戦不戦、二回戦に香川勢と対戦、前半イーージーショットをこぼしたのとパスミスがたたって思わぬ苦戦、さらに終盤にも連続4本のフリースローを落して56-55と全くの惜敗をすれば、高校男子また2回戦に新潟三条高と対戦、前半地元大観衆にあまり気味固くなったが速攻チャンスには転倒して反対に逆速攻を喫し苦戦、後半になって暫く調子を取り戻し追撃、再三1点差まで詰めたがその1点の壁が破れずプレスに出ては反則もあり結局58-55と惜敗する悲運。続いて一般女子一回戦長崎76-28と楽勝し、さい先よいスタートを切ったが準々決勝に埼玉と対戦、前半互角に戦いながら後半は全く埼玉ペースに巻きこまれ52-29と崩れ去ってしまったのである。それにしても本大会の県代表ホープと目され、自他ともに岡山県勢強しといわれていた教員チームが京都の小さなゾーンディフェンスが破れず、68-48と敗退したのは予算ぐるいの最大のものであった。ダークホース、岡山就実が準々決勝で四国の徳島を59-53で敗り、準決勝に進出、強豪島根の安来と対戦、抜きつ抜かれつの善戦には手に汗を握ったが、後半オフェンスのリバウンドボールをとられ安来ペースとなり脚でかきまわされ、57-44で敗れたのは痛かった。

以上岡山勢はいずれも善戦健斗ベストを尽くしたとはいえ、大会三日目にして早くも全種目において姿を消したことは、地元役員の意気を少なからず消沈させた。殊に大会中はもとより大会前より熱心に応援していただいた県民に対しては、“一生懸命やったのだから”とはいうもののなにかそれだけでは済まされない心の負担を感じたのは選手、監督、役員一同の心境であったであろう。

1 6) 国体での競技運営

ここで筆を一転して岡山国体におけるバスケットボールの競技運営は如何になされたかを記述しておこう。このことは何かと後日の参考になる。まず協会では数回の理事会で競技運営の基本方針を討議した。その結果次の六大方針を確認した。

1. 競技運営の鍵は基本的には協会内役員の人和であること。
2. 施設、設備の標準的充実をはかること。
3. オフィシャルの正確性と責任性を確立すること。

4. 報道、連絡の迅速と正確性を期すること。
5. 選手宿舎、交通上の満足を与えること。
6. 競技役員（本県関係）を他競技に先じて確保すること・・・以上である。

さて第一の人の和の問題はバスケットボール協会の構成上最も留意せねばならないことである。すなわち協会の構成者は職業・年齢・性別・学歴・経験それぞれ異質グループであることと、バスケット競技人の性格上より当然でてくる重点でなければならぬ。しかも仕事は人との協力なくしては出来ない。そこで努めて会長を中心にスクラムを組みこれを貫いたのである。

第二の施設、設備の点は最初のころは予算の関係で少々スベリ出しがスムーズで無かったやに思われたが、県主管課の理解ある態度で殆ど標準規格に近いものになった。われわれは肩身の広さを感じた。なかでも最も喜んだのは参加選手であった。

第三は審判、オフィシャルの成績であるが、これについてはとくにオフィシャルの成績は上の上との評であった、約1カ年前からズブの素人をトレーニングして養成したものと、代表以外のバスケット高校選手を当てたのと二種類つくったが、ともに前日まで現場予行演習をする熱心さで、大会期間中終始好評で、安心して審判が出来たとは審判員一同の評価でもあった。中には“オリンピックのオフィシャルは岡山に依頼しよう”などの冗談を出す審判もいた。

第四の報道の迅速、正確、これも申し分なく出来、電子計算機なみだとの評をうけた。

第五の宿舎、交通であるがこれは間接的ながら競技運営にとっても影響する。岡山で大成功したのは競技場が岡山市に集中されたこと、民泊がとても家庭的な上に岡山市民の人々が文化的センスを持ち要を得ていたこと、それに市当局で概ね競技場の近くに選手の配宿をするよう苦慮したことなどがその主因であった。

第六のバスケットボール競技への役員確保と充実、これは随分困った。何故ならバスケットが出来た位の人なら大抵の人が他の2～3の競技に関係していたからである。しかも500人余りの大動員をせねばならぬ、実際困った。でも先手をうって比較的早く依頼したのがよかったと思われる。

かくて六大重点目標がうまくいったことが前述したように、運営面では岡山国体のバスケットボール競技は国体競技の決定版だとの総評、好評を受けた結果であり原因であった。

おわりにこの国体バスケットボール競技の運営の中心的役割を果たした、当時の県協会のメンバーをあげてその労を多として敬意を表す。

- 協会長 — 日 下 連
- 副会長 — 田 中 栄三郎
- 理事長 — 岡 茂 太
- 常務理事 — 山下 博（高体連理事長）、小野雄三、藤井 博、藤川知彦、

山本保典、広田裕史、岡田 護、前田哲哉、古川家道、
橋本 寿、岡本誠一、長塩健吾、坪田 脩、山口雅生、
鈴田常祐、逸見清則

1 7) 歴史的国体を生かす途

歴史は既定の事実である。何人もこれを覆すことは出来ない。しかしこれに対し如何なる態度をとり、いかに対処するかはわれわれの自由である。もはや岡山国体も歴史の中に入り既定の事実となった、これを覆すことはできないがこれから何をくみとり今後これを如何に生かすかは自由である。

さてわれわれは待望した岡山での国体バスケットに期待したような競技成績は得られなかったにしても、当然なこととはいえ学ぶべき多くのものを得た。まずその第一は技術水準というか現在わが国のトップレベルにある技術内容と競技態度というか競技根性をくみとることが出来た。これにより岡山のレベル、競技態度も一段とよくなるだろう。否よくせねばならない。さらに審判技術面でも運営面でも、より高次の段階において反省すべきいくつかのものを学びとることが出来た。そして根本的のものとして国体スポーツがもつよさ、すなわち全国の若きアスリートの団結、人間関係を親密にするよさの再確認でもあった。色彩には多くの種類があるが光は一つしかないということを感じた。兎も角われわれは多くの収穫を得た。これが明日からの県バスケットボール協会への課題でもある。鉄は熱しているうちに打たねばならない。国体ムードのさめないうちに岡山国体を生かす途の反省を数回もった。そして早速実践練習にとりかかった。練習の科学性、根性は各チームに特に強調された、かくて数か月、試練の機会が訪れた。中国ブロック高校選手権（鳥取市）である。38年5月3～4日、今回の岡山県チームの活躍は全く素晴らしかった。まず男子高校代表倉敷工業は、昨年の全国高校覇者松江工業を62－54で破り久しぶりに優勝すれば、女子高校代表就実高校また準優勝、総社高校3位の成績をあげた。さい先よいスタート、今年はやれるぞの感を深くした。岡山国体の余勢である。続いて8月上旬、新潟県三条市のインターハイでも総社高校チームは準々決勝に進出、昨年の優勝校宇都宮女子商と対等にわたりあい優勝戦に出るのではないかと喜ばせたのである。一方男子代表倉敷工業も建斗順調に勝ち進み三回戦に進出、昨年度の準優勝校、伝統の強剛、中大杉並附属高校と対戦、善戦したが惜しくも身長差に敗れたのである。さらにまた“地元国体で優秀な成績をあげた次の年にはよい成績はとれない”とのジンクスを破れと秋の山口国体でも頑張った。しかし不運にも高校男子代表倉敷工業はブロック予選に松江に敗れ、春のタイトルを奪われ2位となり晴れの国体出場ならず、教員、一般とも僅少差で敗れ失格。ただ一つ高校女子代表総社高校が昨年度、本年度ともに全国3位の名門安来を破り優勝、晴れの中国代表としての出場権を得てくれたことは、せめてものなぐさめであった。よし総社にすべてをかけよう。

われわれは全力をあげて応援した。それも総社高校にはインターハイの建斗もあり、安来を破って出て来た貫禄もあり山口国体ではダークホース的存在となっていたからである。 さて戦いの跡は・・・・・・・・

総社高校はシードされて1回戦不戦、2回戦新潟代表北城高校と対戦、試合は予想通り前半をリード好調のうちにラストクォーターに入った。ここで相手のシフトディフェンスが成功、それにリバウンドはとられ、次第に得点差はちぢめられた。後3分遂に逆転された。総社高校はタイムアウトがとれず、あれよと思う中押し切られ敗退するという茶番劇となってしまった。唾然という他はなかった。なお各県代表として出場した就実高OGを中心とする本県一般女子チームも1回戦は余裕をもって勝ち、県単位のチームとしては立派なものとの評を受けながらも、2回戦にはこれまた女子実業団の名門東芝に力つきあっけなく敗退したのである。思えば後味のわるい国体であった。

18) 将来への展望と歴史の要約

さて岡山国体が終わってすでに5年になる。この辺で主として国体後の要約と将来への展望をしておくことは今後のよい参考資料となろう。

① 中学校部門の要約と展望

まず中学校の部から順序を追って記述しておく。昭和25年頃県バスケット競技の強化策として、協会が取り上げた施策の1つが中学校バスケットの普及と指導であった。幸い理事長、岡田 護らの好リードと協会幹部のバックアップが功を奏して、着々と所期の目的を達成していった。

具体例を県下大会の開催にとってみても、第1回(昭和25年)の参加チーム数は14であったが、昭和38年第14回の県下大会は参加チーム数が激増し、ストレートに1カ所では実施できないまでに普及した。そこで大会運営上やむなく地区予選を通過した代表チームをつくり、これにより県下大会を開催することにし、県下を備前第1地区、同第2地区、備南地区、備北地区、美作地区の5地区にわけたのである。現在はまずこの5地区における地区大会をもち代表を選出しているが、参加チームは各地区20を超え地区大会でさえその運営が2日～3日にわたる始末で、量的普及は大成功したといえる。次は質的な課題であるが、これも選手の体格、体力が飛躍的に大型化し長身選手がめだってきたこと、さらに技術的にも協会技術部などの指導と相まって年毎に向上してきたことは喜ばしい限りである。しかも力のバランスがとれて上位チームのゲームは常に接戦が展開されるようになり見ごたえがしてきた。そのためか別表のように連島中学7連勝を除いては一般的に上位チームが固定し王座が同一校チームで独占されるということがなくなった。次に強化と関係深いものとしては、中学校チームの強い地域と高校チームの成績の相関、特に高校女子チームとの相関ができたことである。後述するよ

うに岡山県の女子高校チームの実力は全国女子高校の上位クラスであるが、その基盤は県中学校女子チームの実力に負うところが大きいといえる。以上いずれにしても協会のためとした施策は一応成功の過程にある。今後一層この方面への努力が期待されねばならない。参考までに栄光のあとを一括、年次的に一覧表化し記載しておく。

栄 光 の あ と

岡山県中学校バスケットボール優勝大会				岡山県中学校バスケットボール選手権大会			
年度	回数	男子	女子	年度	回数	男子	女子
25	1	金光学園中学	就実中学	25	1	荘内中学	就実中学
26	2	〃	—————	26	2	〃	—————
27	3	〃	—————	27	3	大井西中学	—————
28	4	〃	金光学園中学	28	4	〃	就実中学
29	5	水島中学	就実中学	29	5	水島中学	〃
30	6	附属中学	福浜中学	30	6	水島中学	就実中学
31	7	〃	金光学園中学	31	7	附属中学	金光学園中学
32	8	連島中学	矢筈中学	32	8	水島中学	矢筈中学
33	9	〃	加茂中学	33	9	〃	就実中学
34	10	〃	津山南中学	34	10	連島中学	〃
35	11	〃	鴨川中学	35	11	〃	総社西中学
36	12	〃	就実中学	36	12	〃	〃
37	13	〃	総社西中学	37	13	旭東中学	〃
38	14	〃	津山東中学	38	14	連島中学	津山東中学
39	15	岡北中学	林野中学	39	15	福浜中学	林野中学
40	16	旭東中学	津山東中学	40	16	旭東中学	津山北中学
41	17	岡北中学	岡北中学	41	17	岡北中学	〃

註 38年14回大会から中学校総合体育大会として行う。

岡山県中学校バスケットボール大会 <夕刊新聞共催>

年度	回数	男子	女子
30	1	水島中学	就実中学
31	2	〃	金光学園中学
32	3	大井西中学	矢筈中学
33	4	連島中学	〃
34	5	〃	就実中学

35	6	連島中学	鴨川中学
36	7	旭東中学	総社西中学
37	8	連島中学	津山東中学
38	9	水島中学	林野中学
39	10	旭東中学	津山東中学
40	11	水島中学	岡北中学
41	12	附属中学	津山北中学

註 8回大会から新人大会として11月に実施することになる。

本大会に於いてその年度の優秀選手による東西対抗戦を39年10回大会を記念に実施する。

東軍＝備前第1・第2地区 西軍＝備南・北・美作地区として行う。

両軍共男女12名ずつ

		男子	女子
39年	1回	東軍	西軍
40年	2回	西軍	東軍
41年	3回	西軍	東軍

② 高校部門の要約と展望

高校部門は昭和37年の岡山国体までかなり詳しく記述してきたので38年以後の要約と展望にとどめる。まずその結論としての成績は次表のようになっている。(県選手権保持校のみ)

男子の部 38年～41年 倉敷工業高校

女子の部 38年39年総社高校 40年岡山南高校 41年片山女子高校

まずここでも特筆することは依然倉敷工業高校の王座が揺るがぬことである。伝統の力の偉大さというかコーチ、選手の努力というかインターハイ出場も19回中15回という全国でもまれな出場回数をもつことである。しかし惜しむらくは毎年のように小型であること、そのために全国の上位レベルに乗り出せないことである。それに引きかえ女子チームは往年の山陽、就実の名誉を今日まで保持し、インターハイ出場のチームは総社高校、岡山南高校、片山女子高校(現倉敷翠松高校)と次々と替わって出場するが、その相対的レベルは高く中国の雄となり全国的にも上位に進出、その伝統を守っているのである。いわば岡山県は女護の島、女子勢力によってカバーされている格好である。その原因がどこにあるかを探索するのであるが、まず男子の場合は体格や体力に恵まれた優秀選手が野球部に喰われているきらいがある。また今までは中学校に大型の選手がいなかったこと、中学校チームとの連携がよくとれていなかったこと等々、それにして

も由来岡山県には長身選手とくに190cm 台の選手が出てこない。ここらにも原因があるのではないか。将来の高校男子のバスケット選手としては全般に180cm 以上で、中にできれば190cm 台のものが2～3名はいる大型チームであることが好ましい。コーチや設備も現状で十分とはいえないがそれ以上にほしいのは素質のある選手である。よい選手はつくるのではなく出来るのだといった人があるがまさに岡山県では待望切なるものがある。そうすると現状ではやはり女子チームに期待をかけねばならないことになるが、女子選手の素質は他県に比してひけをとらない。さらにトレーニングの方法やコーチングの問題を研究し情熱をかけて指導すれば、かつての就実高校のようにトリプルクラウンの偉業も夢ではない。

さて岡山国体後のめだった現象として県下私立高校運動部、とくに片山女子高校、美作高校らの女子運動部のめざましい躍進がある。これは全国的傾向でもあるが岡山県ではそれが顕著である。近い将来バスケットボール競技においても私立高校が連続制覇する、いわゆる黄金時代がやってくるのではないか。現にそのきざしは見えている。その原因が何であるか、そんなことは問う必要もないがその基盤となっているのは県下中学校の女子優秀選手であることを思うと、県協会としても将来益々大乘的見地にたつてこうした中学校チームの育成につとめる必要がある。

③ 一般男女、大学部門の要約と展望

結論的に一般男女、大学チーム部門についていえることは現状をもってしては中国ブロックの代表となるのが関の山であるということである。何故か、それを一言にして選手をとりまく環境条件が余りよくないからだと答える。但し岡山県にも近代化の波は押し寄せ石油コンビナート水島を中心に大企業が續々誘致されているので、こうした会社や工場がつぎつぎにバスケットボールのチームづくりをするようになると話は別になる。われわれはその日の1日も早く来ることを願ってやまない。このことも夢ではない。すでに一般男女、実業団チーム数は大幅に増えている。一方、教員チームや大学チームも地方チームとしてはかなりの実力をもっているが、いずれにしても交通機関や仕事のために練習量が少なく、大会直前にやや身を入れて練習する程度ではこれ以上の成績を望むのは無理だろう。また選手の質にしても中央のそれのように思うようには得られない壁がある。次に岡山国体以後の関係成績を記載して参考資料とする。

年度	(A) 一般の部選手権		(B) 岡山県総合選手権	
	(男)	(女)	(男)	(女)
38年	教員クラブ	岡山短大クラブ	岡山クラブ	就実高校
39年	教員クラブ	就実クラブ	倉敷商業高校	総社高校

40年	岡山クラブ	就実クラブ	教員クラブ	就実高校
41年	教員クラブ	就実クラブ	教員クラブ	就実クラブ

④ 外国へ派遣された選手

次に本県バスケットボール競技界を外から刺激し、間接的にレベルを向上したものに県出身の海外派遣選手がある。これらは主として総社高校や就実高校の出身者で卒業後、日紡平野や三菱名古屋に入社してバスケットボール部で活躍、オールジャパンを始め全国的大会に優秀な成績をあげ、日本協会から推薦されて海外に派遣された人々である。すなわち或者はバスケット競技を通し国際親善に貢献し、或者は世界選手権に参加して大きく日本女性を代表して意気とマナー、体力と技術スポーツ精神などを遺憾なく発揮したのである。なおこれらの大会派遣団監督として数度の遠征をした県出身の尾崎正敏を忘れてはならない。彼は終戦直後岡山二中はなやかなりし頃の名ガードで後に早大に進みマネージャー、選手を体験して、日紡平野の監督となったのである。そして無敵の日紡200勝余の連続勝の偉業をうちたてたのである。彼の膽大小心の理論と科学的ハードトレーニングは定評がある。岡山県が誇ってよいわが国現代の名コーチと断言しても差支えないだろう。次に一覧にして要約紹介しよう。

<日紡平野>

年月	遠 征 国	大 会 名	参 加 者 氏 名	
35.11 ～ 12	フィリピン (マニラ)	第5回東南アジア 親善バスケットボール大会	尾崎正敏	杭田 孝子 (総社) 大石 豊子 (就実) 近藤三枝子 (総社) 矢吹 淑重 (総社) 竹本 育子 (就実)
38. 2	韓 国 (ソウル)	朴將軍盃東南アジア 女子バスケットボール大会	尾崎正敏 鈴田常祐	杭田 孝子 (総社) 大石 豊子 (就実) 近藤三枝子 (総社) 竹本 育子 (就実) 岡 雅子 (金光) 高本 道子 (総社)
39. 8	韓 国 (ソウル)	親 善 試 合	尾崎正敏 鈴田常祐	竹本 育子 (就実) 岡 雅子 (金光) 高本 道子 (総社) 守安 其子 (就実) 前田 洋子 (就実)

40.4	韓国 (ソウル)	第1回アジア女子 バスケットボール選手権大会	尾崎正敏 鈴田常祐	高本 道子 (総社)
41.3	中国 (北京、天津、 南京、上海、広州)	親善試合	尾崎正敏 鈴田常祐	高本 道子 (総社) 前田 洋子 (就実) 坪井 妙子 (総社)
42.4	チェコスロバキア (ゴットワルドフ、プラハ)	第5回世界女子 バスケットボール選手権大会	尾崎正敏	前田 洋子 (就実)

<三菱名古屋>

年月	遠征国	大会名	参加者氏名
38.	ペルー	第3回世界女子 バスケットボール選手権大会	秋山 捷子(総社) 難波 武子(総社) 片岡 靖子(総社) 藤原 良美(総社)

さていよいよ県協会バスケットボール史を撰筆しようとして、さらに全般的に要約、考察を加えれば、岡山県のバスケットボール競技の歴史は未だ40年余りしかならないが、どちらかといえば比較的順調に伸びてきたといえよう。そしてその特質とも思われる2～3を拾えば、まずなんとといっても高校(旧制中学校)バスケットがその中軸をなして発展してきたということ。しかも全国的に活躍した女子高チームに刺激されながらといった感が深い。そして活躍したチームはまたいずれも情熱の監督、指導者がいてこれらに強力にけん引されたこと。ここでも教育は人だの感が深いということである。

次にその40余年間は大きく5つの時代に区分されるのではないかということである。すなわちその第1期は県協会創立期の未組織時代で、組織への胎動が感ぜられ矢掛中学や岡山高女が活躍した時代である。第2期は昭和8年協会成立から太平洋戦争がたけなわになりやむなく本競技が中止される間で、約10年間、組織時代というか特質的には山陽高女の黄金時代である。第3期は終戦から昭和25～26年までの再建期で、女子では西大寺高校、玉野高校、男子では倉敷工業、操山高校等が活躍した時代であり、また協会の中堅幹部が敗戦の中から立ち上がりに苦労した時代でもあった。さて第4期は27～28年頃から岡山国体までの約10年間で充実時代というか、まず設備の整備、指導陣の充実、競技技術、審判技術、運営方法等が飛躍的に発展充実、質的にもかなり変革のあった、いわば県バスケットボール界のルネッサンスともいえるべき時代であり、女子では就実高校、総社高校が、男子では依然倉敷工業が強く操山高校、倉敷商業がこれに続いた時代であった。かくして岡山国体を境に第5期に入り形式的な領域から内容

的に充実、飛躍せねばならない時期を迎えたわけであるが、果たして期待通りの時代となるか。その前軀症状ともいえるべき一端は前述したとおりであるが、今後さらに興味と期待がかけられている次第である。さてその充実にはまず協会メンバーの団結、チームワークが根源とならねばならないだろうが、選手、指導者の“何が何でもやるんだ”という心と心の対決、根性トレーニングと中学時代よりの計画的指導、高校に入ってそして大学に入ってから科学的ハードトレーニングが、その基本となるだろうということはまちがいのない基本原則といえよう。そこにこそ岡山国体開催の結実があり、先輩が営々辛苦、基礎づくりをしてきた悲願も達成されると思うのである。

1 9) 歴史をつくった人々

歴史の歯車は時と処と人の相関、特に無名の人々の力によって進められることが多いが、情熱をもって引っ張る機関車的な存在も忘れてはならない。最後に岡山県バスケットボール協会史40有余年の歴史づくりにこうした役割を果たした数名の人々につき、その功績をデッサンし敬意と感謝の微意を表し本稿を終わることにしよう。

さて初期、協会創立当時の中核的推進者は何と云っても、西村静夫（旧姓、中西）であろう。彼の功績の大きなものは前述したように大正12年、早くもバスケットボール競技を本県にとり入れたことと、昭和8年岡山県バスケットボール協会を創立したことである。彼はこの先覚者的センスと情熱的推進力をもって大正12年6月より昭和12年まで約15年間、矢掛中学（現矢掛高校）、後3年津山高校などで教鞭をとり、その間終始県内および近府県に出向きバスケットボール競技を啓蒙、普及することに努めた。また学校内では情熱を傾けて指導にあたり、厳格な中に科学的研究により、合理的コーチは平素の温かい人間的接触と相まってよく生徒を引きつけ着々と成果をあげていったのである。そして大正末期から昭和の初頭にかけて矢中強しの名を近府県に知らせ、昭和6年には明治神宮体育大会の第1回バスケットボール競技に出場させ関西に矢中ありとその存在を明らかにするまでになり、また彼の教え子には、かつて全国的バスケット名選手（文理大）＝（現お茶の水大の教授）石山平作がいる。協会創立についても前述したように彼は、大橋哲一等と東奔西走、啓蒙、指導、説得と持ちまへの先覚者センスとファイトでやり通しやっとなんげと誕生させたのである。昭和21年矢掛を去り、津山に転任しては県北の開拓、啓蒙に当たったがやがて教職を去り協会からも手を引いたのは本県協会のためにもバスケット競技推進のためにも大きなマイナスであった。

次に県協会史からいえば第二期から三期にかけて協会の中心的人物として協会の育成に努力した大橋哲一に感謝を捧げたい。

彼は高梁中学（現高梁高校）から日本体育専門学校に進学、帰省して山陽高女に就職、その後その功績は主として女子バスケット競技のレベルアップと協会の基礎づくりに貢献したことである。すなわち昭和6年～7年頃から14年まで、いふなればバスケット

ト山陽高女の黄金時代をつくり、西日本はもとより全国的に岡山女子のバスケットボールの声価を高くしたこと、またその間、県協会の推進力となり競技の普及に協会の充実に精魂を傾けてことである。昭和14年懇望されて一時京都府立一女に転出したが、終戦後は再び岡山に帰り倉敷青陵高校に勤務、前にも増して県協会の育成に努力した。特に終戦後あの耐乏生活の中で果たした理事長の功績は高く評価されてよいだろう。昭和34年不幸、病を得て教職を退くまで前後20年近く全くバスケット競技一筋に生きたのである。そのためか昭和31年には日本バスケットボール協会から功労賞を授けられ、また38年岡山国体の翌年には県協会からも感謝状と記念品を贈られた。また彼が若かりし頃いかに情熱を傾けて指導したか、人間的教育をしたかについては次のような裏付けエピソードもある。北房町の旧家に生まれた彼には若いころかなり先祖伝来の財産があったらしい。ところが何時の間にかその殆どをバスケット指導のために消費しつくし、教職を退く頃は逆に生活にもかなり困ったとか。また彼が不幸病魔に倒れたときは、どうして知ったか数十年前のかつての山陽高女、京都府一女のバスケット教え子たちが看護や慰問に馳せ集まったとか。何れにしてもかれの人間性の一端を物語る心温まり涙うるむエピソードではある。

さて大橋の次には特に終戦後から歴史づくりに多大の貢献をし県協会を再建した牽引車としての小野寿吉をたたえよう。

岡山の繊維問屋、小野善の御曹司に生まれた彼は岡山二中当時からバスケットが好きで、早稲田大学に進んでもムラパンの愛称でレギュラーやマネージャーで活躍した。卒業後は郷土に帰り後輩にバスケットを指導、岡山クラブを結成するとともに終戦後は中国地区理事として日バの関西探題的役割を果たしてきた。すなわち終戦後の再建県協会会長として、あの困難な時、環境に処して的確に裁いていったのみでなく、中国地区各県のバスケット協会の推進、日バへの協力に貢献、技術指導、審判員養成、インターハイ誘致、大会の運営指導等々とくに前述したように就実高校の昭和28年度、トリプルクラウンの偉業は山口雅生と取り組んでのコーチ力の一端を示したもの。兎に角彼は主として終戦後、約15年間、再建県協会の会長としてまた中国地区理事として残した功績は大きかった。そのためか中国新聞社は彼に中国スポーツ功労章を贈ってその功績を讃えたのである。昭和36年勤務先の都合で東京に転出、晴れの岡山国体には不在で主役が果たせなかったが、それまで専心岡山国体の準備をして来ただけに県スポーツ界から惜しまれた。しかし培った土壌は深く、あの国体が決定版だといわれた成績をきいては彼もさぞ満足したことであろう。

さて小野寿吉を語ればこれと離すことの出来ないものにコーチの山口雅生がおり、審判面では小野雄三（旧姓・津崎）がいる。

山口は小野寿吉のよきパートナーで関西中学時代からバスケットに取りつかれ、小野寿吉の後輩として早稲田大学に入学、活躍していた時代がわるく、中途にして日中、太

平洋戦争に従軍、あたら青春時代をつぶしてしまっただが、しかし性来の愛球家、バスケットマン、終戦後はいち早く岡山クラブを作り、自らもボールを握るとともに後輩の指導や協会の再建に縁の下の力もち的役割を果たした。特に終戦後のコーチ面における功績は大きく、浸み入った地下水のように地味であるが、こんこんとして尽きるところを知らなかった。就実高女を率いては前述したような成績をあげ、また岡山クラブを育てては10年余りタイトルを持ち続け、女子一般に眼をつけては囲生クラブを誕生させ、幾度か国民体育大会に顕著な成績を残したのである。昭和30年頃から近畿大学にコーチとして招かれて岡山と大阪を往復するようになってからは、その指導も意のように受けられなくなったが、兎に角にもコーチとしては県協会の貴重な存在であった。

一方小野雄三は小野寿吉の指導を受けたのをきっかけとして、審判技術面では偉大な存在となった。わが国でも有数の国際審判員にのしよってしまったからである。独特のジェスチャーと鋭い動き、深い読みによる正確なジャッジは定評がある。オールジャパン、オール学生、国民体育大会を始めアジア大会や数次の国際試合で鍛えたキャリアは、やがて思い出の東京オリンピックにも優秀な成績を飾ったのである。なお特筆すべきはそれよりも度々自費をさいて現在も講習会に出向き、県内は勿論中四国近県での後輩に対する審判技術の指導をしたことである。これは並大抵のことでは出来ない仕事である。これがどれ程各地区の大会運営をスムーズにし、スポーツ文化を向上させているかは知る人とぞ知るといえよう。また小野寿吉の後を受けて中国理事としての活躍は岡山国体や山口国体に遺憾なく発揮されたが、自費をさいて現在でもその努力は続けられているのである。彼の生業は患者を医する国手であるが、バスケットへの情熱はあるいは彼自身をバスケット神経症にしているのかも知れない。しかし目下のところこの病人を治療する名医はいない。

その他、戦前戦後協会の歴史づくりは、野崎新作（戦後の協会づくりや指導）山下 博（戦後の協会づくり、とくに高体連関係の県、中国、全国の組織づくり）藤川知彦（審判や協会づくり）谷川 清（戦後の協会づくり）岡本誠一（高校女子の技術レベルアップ）山本保典（競技や審判の技術向上）広田裕史（審判技術の向上）岡 茂太（協会理事長事務）岡田 護（県中体連育成）等々なお多くの人々に支えられて来たが、これらの方々は未だ現役で働いており、それにスペースにも限りがあるので詳しく述べることは後日に割愛せざるを得ない。何時の日にか、誰かが記述、これらの人々についても必ずや頌徳するであろう。

〈 お わ り 〉

岡山県バスケットボール協会史 復刻版編纂に際し

山下 博（執筆責任者）氏の紹介

元 県協会常務理事・参与

県高体連常務理事、副理事長

倉敷工業高校 教諭（バスケットボール部顧問）

岡田 護（現 県協会参与）氏から所蔵の原本をお借りした。

平成20年 8月

協会史復刻版編纂委員

秋山孝志、岸本和巳、古河正道、齋藤 裕、穂山靖夫